

高等学校における教科横断による事前検討重視型の授業研究の開発

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科高度教職実践専攻
 神奈川県立横浜平沼高等学校
 佐々木 智三

1. はじめに

現在、高等学校における組織的な授業研究の開発が求められている。例えば、吉崎（2012）は高校の授業を対象とする授業研究を活性化させることの必要性に言及している。その背景として、求められる学力の変容がある。

現在においては、知識・技術の定着のみならず、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力が求められるようになってきている。得た知識をどのように活用するかを自ら考えて、その考えを発信する表現力を育成し、より向上しようとする意欲が重要になっており、各教科の学習内容のみならず、学び方や学習に対する姿勢を丁寧に指導する必要がある。上記を実現するには、教員の授業力の向上が不可欠である。そのためには、授業研究を進めていくことが効果的であり、露口（2016）は、「確かな学力の向上のためには、教師の授業力の向上が必要不可欠である。授業力の底上げを図るために、近年では、教師間の相互交流活動による組織的・集合的な改善が必要である。」と述べている。

一方で、高等学校における授業研究は、教科の枠組みで行われる事が多く、それらを越えて学び方や学習のあり方が対象になることは必ずしも多くなかった。そこで、本研究では、高等学校の教員を対象とした、教科の枠を越えた事前検討重視型授業研究を開発し、実践を行った。

2. 実践内容

開発した授業研究の具体的な流れは、図1の通りである。校内における既存の体制の中で実施するのではなく、若手教員11名（英語科3名、数学科3名、国語科1名、理科2名、地歴・公民科2名で、5教科で各教科最低1人が所属するようにした）で構成された新たな授業研究会を設置した。それにより、日程や時間の調整が難しいものの、授業研究に専念して話し合いができる。実施の際は、放課後における生徒指導や部活指導、職員会議など普段の業務とのバランスを考え、開催回数をできるだけ少なくし、1回の開催時間も30分程度と短く設定することを意識した。

本稿では、これまでの実践の途中経過を報告する。初めに、課題把握・分析のため、授業に対する意見交換を実施した。授業に対する悩みの中で、グループワークが挙げられた。それにより、話し合いの焦点を絞り込むため、こちら

で生徒の理想像と授業形態を焦点化し、「生徒が主体的・協働的に学ぶために、効果的なグループワークを実施するにはどうしたらよいか」という内容を研究会のテーマに設定した。

焦点化した内容をメンバーと共有するために、「主体性」についての話し合いを行った。グループワークにおいて生徒が主体的に取り組む状況はどのようなものなのか、また、それを引き出す手立ては何なのか。それらを考えながら話し合うことで、今後の事前検討の材料とし、教科の学習内容を越えた授業づくりに活用していく。

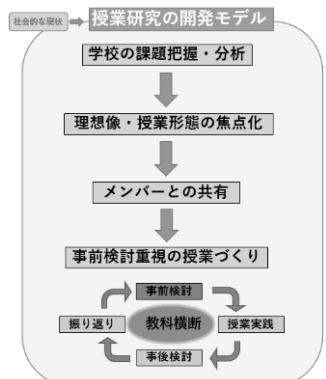


図1 授業研究の開発モデル

3. 評価方法

研究会メンバーの教員による事前アンケートや研究会毎のリフレクションシート等を利用し、教員の変容を質問紙形式で評価する。また、生徒の変容として、研究授業実践後のインタビューや簡単な授業に関するアンケート調査を実施する。期待される成果として、教員同士の教科を超えた組織的な学び合いの実現と、その取組による副次的効果として、生徒の受け身がちからの脱却である。

参考文献

露口健司（2016）「つながり」を深め子どもの成長を促す教育学。ミネルヴァ書房
 水越敏行、吉崎静夫、木原俊行、田口真奈（2012）教育工学選書第6巻 授業研究と教育工学。ミネルヴァ書房
 鹿毛雅治（2007）子どもの姿に学ぶ教師「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」。教育出版
 杉江修治（2011）協働学習入門～基本の理解と51の工夫～。ナカニシヤ出版
 神奈川県総合教育センター（2015）組織で取り組む授業研究の工夫に関する研究